

第 11 回 「三学戎」から

わが国気象観測史上初めてという暖冬の 2007 年 2 月上旬、研究会のため上京の折、高校時代の同級生の M 君と夕食をともした。彼は東北大学在学中に司法試験に合格し、今は国会議事堂の近くで法律事務所を開設しているが、お互いの気心が通じ、会うといつも話題が尽きない。M くんは筆者にとって数少なくなってきた専門分野が異なる親友の一人である。2 月のその折の話のなかでの現在の日本人の精神・情緒を形づくっているのは江戸文化であるということが記憶に新しい。

江戸時代(1603 年～1867 年)は鎖国が続くことによって、外来文化交流が途絶え、人間生活に関する政治・宗教・芸術・学問などのあらゆる面で、それ以前にわが国の風土に醸成された情緒や感性の諸産物を凝縮ないし固定してしまったといっても過言ではない。日本固有の文化の形として能・狂言・華道・茶道・仏教などが国民の間に一般的になるとともに、俳諧・小説・人形浄瑠璃・歌舞伎などの新たなジャンルが出現した。多様な人間性の表現様式であるこれらの文化は、太平の風潮に支えられて、階級を超えて一般庶民の間にも広まった。

一方政治面では、幕藩体制を維持すべく身分制度が確立するとともに、それを支える精神的支柱として中国伝来の儒学である朱子学や陽明学といったような道德規範を重んじる学問が日本化して国学となった。江戸時代の国学を担当したのは幕府に仕える儒官達であったが、太平の文化が爛熟した江戸後期には、庶民ならず、武士階級においても武術に代わって身を立てる手段として学問も重要視されるようになった。

儒学は、春秋時代(前 770 年～前 403 年)に孔子に始まり、中国では政治や道德の規範として出色の地位を保ってきたが、南宋の時代(960 年～1279 年)に朱熹(1130 年～1200 年)によって再構築され、日本に伝来して朱子学として広まった。初期の朱子学では、自己と社会、自己と宇宙は理という普遍的な原理で結ばれており、自己修養によって理を把握することで社会秩序の維持に到ることができるということである。朱子学では孟子(前 372 年～前 289 年)の性善説を極端に尊崇しているといわれる。明朝(1368 年～1644 年)において朱子学の權威が確立し、国家体制の擁護に役立ったが、その反面、道德に関する側面が失われていった。それを再生しようとしたのが王陽明(1472 年～1528 年)であった。しかしながら、日本に伝わった陽明学には個人道德に偏重する傾向があったために、むしろ反体制的な人々に好まれることが多かった。江戸時代の代表的な陽明学者は中江藤

樹やその弟子の熊沢蕃山らがいるが、蕃山は幕府批判のかどで幽閉され没している。一方朱子学は、江戸時代に昌平黌の前身である弘文館を創設した林羅山(1583年～1657年)により武家政治の基礎理論として再興されて、幕府によって国学とされた。その思想は近代日本の軍部の一部にも影響を与え、二、二六事件や満州事変にも関係したといわれる。

(フリー百科事典「ウィキペディア」2006年10月25日)

江戸時代後期から幕末にかけて著名な儒学者が輩出したが、なかでも本稿の「三学戒」の作者佐藤一斎(1772年～1859年)は出色の学者の一人である。一斎は、美濃(岐阜県)岩村藩に生まれ、藩主の近侍となり、その第三子(のちの林述斎)とともに生涯学問の道を歩んだ。1841年(天保12年)70歳の時、林述斎死去により幕命で儒官となり、朱子学を主学問とする昌平黌教授となった。一斎は、朱子学とともに陽明学にも見識を広め、そのため尊敬をこめて「儒朱陰王」とよばれ、6,000人とも言われた門下生がその教を請うために集まったという。門下生のなかには幕末活躍した佐久間象山、渡辺崋山、横井小楠などがいる。一斎が残した著書の中の随想録には、壮年期の「言志録」、60歳代の「言志語録」、70歳代の「言志晩録」、80歳代の「言志耄(てつ)録」があり、それらを合わせた「言志四録」がある。のちに西郷隆盛は、これらから101カ条を引用して書き写し、座右の書としたということである。(山下龍二:佐藤一斎,ブリタニカ国際大百科事典,8巻,305-306,ティビーエス・ブリタニカ,東京,1973年)

「三学戒」は、70歳代一斎が記した「言志晩録」にある言葉のひとつで、「少にして学べば則ち壯にして為す事あり。壯にして学べば則ち老いて衰えず。老いて学べば則ち死して朽ちず。」というものである。この言葉は、2001年5月当時の小泉純一郎首相が衆議院での教育関連法案の審議中に引用している。筆者は小泉前首相が揮毫された色紙(コピー)を持っているが、現在書見机の前に飾っているほど最近とくに気に入っている言葉である。

一斎は、生涯学問への探究心が極めて旺盛で、しかも一貫して国学という専門分野に限られていた。一斎のような国学者は、例えば著名な博物学者・戯作者である平賀源内(1728年～1779年)のように国学や蘭学に関心が向くままに修学し応用することで天才的成果をあげているのとは対称的である。平賀源内が狩猟型学者とすれば、一斎は重厚な農耕型学者に属するであろう。一斎はたゆみない勉学によって朱子学の碩学としての実力を備えた60歳を過ぎてから昌平黌教授となったが、三学戒を著したのはそれより十数年後になる。教授としてたゆまず朱子学を極めたいといそしみつつ、門下生に教えながら色々なことを考えたであろう。門下生達の才能は玉石混淆であり、それらに解りやすく教えるのは必ずしも容易ではなかったに違いない。6,000人を超える門弟が集まったということは、一斎の教える国学が解りやすいばかりでなく、教授として魅力溢れる人柄であったのであろう。門弟を含む世

の人々に向かって生涯勉学する必要性を説いたのは、自らの経験に基づいた信条のためであったと思う。一斎は古希を過ぎてもまだまだ心身共に衰えを感じなかったのであろうし、過ぎ去った自らの学徒としての道程を振り返って誇りと自信に満ちていたのが感じられる。筆者には一斎の晩録以後は遺言を書き残すような気持ちで書いたようにも思える。

三学戒のなかで筆者が注目したいのは最後の行「老いて学べば則ち死して朽ちず」である。生涯ゆるみ無く勉学を続けて、その成果を社会に還元することにより、業績と共にその名も永く後世の人々に語り継がれ残るものである。遺志を継ぐ人間が次々と世に出ることで自分というものが後世に残っていくということなのであろうか。筆者は、佐藤一斎の云う「死しても朽ちず」の真の意味がどのようなものか未だに曖昧にしか解釈できないのである。

この次また M 君に会ったときには、そのようなことも話してみたいと思っている。